

特集にあたって

10年後の在宅医療の望ましい姿を見すえて いかにつながり、拡げ、新たなかたちを目指すか

企画・構成 川越正平 Kawagoe Shohei

(医療法人財団千葉健愛会理事長, あおぞら診療所院長)

高齢化や世帯人員の減少など、社会情勢は刻々と変化しており、これまでのところ標準的なあり方が確立していない若い分野である在宅医療は、どんな方向を目指して歩を進めるべきなのか、見通すことは容易でない。地域ごとに医療介護を提供する資源などの状況も大きく異なるからなおさらである。そこで、10年後の在宅医療の進むべき道の“海図”と“羅針盤”を指し示す機会となるべく、日本在宅医学会第20回記念大会を2018年4月29日・30日に東京都品川区で開催する。

本特集では、大会で企画した60程度のシンポジウム、50程度の教育講演のなかから、【病院と地域をつなぐ】【在宅医療の拡がり】【新たな在宅医療のかたち】という切り口を立て、これに合致するテーマを選びすぐって、登壇者にご執筆いただくこととした。

在宅医療の重要性は揺るぎないものの、そのノウハウを病院の医療にいかに関与させるかは、在宅医療に従事する者にとって、目の前の患者に医療を提供する臨床以外の、もう一つの重要な使命であると認識したい。【病院と地域をつなぐ】の各論稿が大きな示唆を与えるものと期待する。

また、在宅医療は介護のあり方と深く結びついて推進され、多職種との協働が必要不可欠である。そのノウハウは災害の現場でも活きる。さらに、地域社会にその意義を啓発する取り組みも重要である。このように、在宅医療がさまざまな形で拡がっていく展開を【在宅医療の拡がり】のパートでご解説いただく。

さらに、医療的ケア児や精神疾患患者が好例だが、今後必要性が増していく領域について、新たなスタイルの構築とその充実が必要となる。単体の医療機関では解決できない課題に取り組むためには、職能団体や行政が旗を振って取り組む必要性も増す一方である。そのような在宅医療の未来形を【新たな在宅医療のかたち】で指し示していただく。

本特集と日本在宅医学会第20回記念大会が、読者にとっての“海図”と“羅針盤”となって、次の10年に進むべき道を指し示すものと確信する。